

金井別所遺跡

1988.5

中国電力株式会社新津山変
電所文化財発掘調査委員会
津山市教育委員会

金井別所遺跡

1988.5

中国電力株式会社新津山変
電所文化財発掘調査委員会
津山市教育委員会

序

金井別所遺跡は中国電力株式会社岡山支店の新津山変電所建設に伴い発掘調査された遺跡であります。この一帯は非常に遺跡の密な地域で、弥生時代中期から古墳時代にかけて特に多くの遺跡が知られています。本遺跡はその中の1つに相当するものです。

発掘調査により出土した2号住居址の一括土器は、弥生時代中期の土器編年を研究する際非常に貴重なもので、当地域の基準資料になるものと期待しております。また、炭窯と考えられている窯址からは須恵器が出土しており、考古学的に時期を推定できる資料としてこれまた貴重なものと考えられます。

発掘調査担当職員の異動等により、正式報告書の刊行が今日まで延び延びになってしましましたが、関係各位の御努力によりここにようやく刊行の運びとなりました。各位の御活用をいただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大の御協力をいただいた原因者である中国電力株式会社岡山支店、並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和63年3月31日

中国電力株式会社新津山変
電所文化財発掘調査委員会

委員長 木村岩治

例　　言

1. 本書は中国電力株式会社岡山支店が計画した新津山変電所建設に伴う金井別所遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査経費はすべて原因者である中国電力株式会社岡山支店の負担によるものである。
1. 発掘調査は津山市教育委員会文化財保護主査河本清が担当し、調査補助員国貞圭也が補佐した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は磁北である。
1. 本書では遺構配図等に遺構の略称を用いた。略称名は次のとおりである。
S H：住居址、S T：段状造構、S G：土壙墓、S K：土壙、S F：道、S X：窯址
1. 本書第2図に使用した「金井別所遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山市東部）を複製したものである。
1. 遺構の実測は河本、国貞が担当した。遺物の実測、遺構・遺物のトレースは国貞、光延稻造、村瀬隆、行田裕美、保田義治、小郷利辛が担当した。
1. 本書の執筆はI、II-1・2、III-4を行田、II-3を河本、III-1、IVを保田、III-2・3を小郷が担当した。
1. 窯址の考古地磁気測定は中島正志、夏原信義、渋谷秀敏、川井直人氏にお願いし、測定結果をいただいた。
1. 出土遺物、図面は津山市二宮埋蔵文化財整理事務所に保管している。

本文目次

I 立地と周辺の遺跡	1
1 位置と立地	1
2 周辺の遺跡	1
II 調査経過	3
1 調査に至る経過	3
2 調査体制	3
3 調査経過	4
III 調査の記録	5
1 住居址・段状遺構	6
2 土壙墓・土壤	24
3 窯址	27
4 古道	30
IV まとめ—金井別所遺跡出土弥生土器の編年的位置	32
(付) 金井別所遺跡の熱残留磁化による年代推定	
中島正志、夏原信義、渋谷秀敏、川井直人	36

図版目次

図版 1	1 金井別所遺跡遠景	図版 8	1 窯址（煙道から）
	2 トレンチ設定状況		2 煙道石組み
図版 2	1 住居址 1	図版 9	1 窯体内天井陥ちこみ状況
	2 住居址 1 完掘状況		2 天井片角材痕
図版 3	1 住居址 2	図版 10	1 窯体被熱状況
	2 住居址 2 一括遺物出土状況(1)		2 古道
図版 4	1 住居址 2 一括遺物出土状況(2)	図版 11	出土遺物(1)
	2 住居址 3	図版 12	出土遺物(2)
図版 5	1 段状遺構 1	図版 13	1 出土遺物(3)
	2 土壙墓		2 出土遺物(4)
図版 6	1 土壙墓完掘状況	図版 14	出土遺物(5)
	2 土壙		
図版 7	1 窯址全景		
	2 窯址（炊き口から）		

挿 図 目 次

第1図 金井別所遺跡位置図	1
第2図 金井別所遺跡と周辺主要遺跡分布図 (S=1:25000)	2
第3図 金井別所遺跡周辺地形図 (S=1:3000)	4
第4図 金井別所遺跡遺構配置図 (S=1:1000)	5
第5図 住居址1平面・断面図(平面・a-b・c-d・g-h断面 S=1:80, e-f断面 S=1:40)	7
第6図 住居址1出土土器 (S=1:4)	8
第7図 住居址1出土石器 (S=2:3)	8
第8図 住居址2平面・断面図 (S=1:80)	9
第9図 住居址2出土土器[1] (S=1:4)	11
第10図 住居址2出土土器[2] (S=1:4)	12
第11図 住居址2出土土器[3] (S=1:4)	14
第12図 住居址2出土土器[4] (S=1:4)	15
第13図 住居址2出土石器 (1~5 S=2:3, 6 S=1:2)	16
第14図 住居址3平面・断面図 (S=1:80)	17
第15図 住居址3出土土器 (S=1:3)	18
第16図 段状造構1平面・断面図 (S=1:20)	19
第17図 段状造構1出土土器[1] (S=1:4)	20
第18図 段状造構1出土土器[2] (S=1:4)	21
第19図 段状造構1出土石器 (S=2:3)	21
第20図 造構に伴わない土器 (S=1:4)	22
第21図 造構に伴わない土製品 (S=2:3)	22
第22図 造構に伴わない石器 (1~3 S=2:3, 4~5 S=1:2)	23
第23図 土壌幕平面・断面・遺物出土状況図 (S=1:40)	24
第24図 土壌幕出土土器 (S=1:3)	26
第25図 土壌平面・断面図 (S=1:20)	27
第26図 窯址平面・断面図 (S=1:80)	28
第27図 窯址断面図・煙道平面・断面図 (S=1:40)	29
第28図 窯址出土土器 (S=1:3)	29
第29図 古道出土土器 (S=1:4)	30
第30図 金井別所遺跡壺形土器類型	35

I 立地と周辺の遺跡

1 位置と立地

金井別所遺跡は津山市金井972番地他に所在する。吉井川の支流広戸川下流の東岸一帯の金井地区は標高130~150mの丘陵と比高差30~50mの平野部が樹枝状に入り込んだ複雑な地形を呈している。金井別所遺跡はこの中の一丘陵上に立地する。調査区は丘陵頂部から北西方向に派生した尾根上にあたる。この尾根の南西側はかなり急峻な地形を呈し、北東側には小支谷が入り込んでいる。このため鞍部状を呈する尾根上はさほど広い平坦面をもたない。

2 周辺の遺跡

金井別所遺跡の周辺一帯は弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が非常に密な地域である。最近、津山中核工業団地造成に伴う発掘調査が実施されたが、第2図の分布図が示すように、4~13の計10遺跡の存在が明らかになった。これらも含めて時代順に概観してみよう。この地域での遺跡の占地は弥生時代中期から開始される。弥生時代中期の遺跡としては西吉田遺跡、一貫西遺跡、深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚遺跡があげられる。いずれも住居址数軒から構成される集落遺跡である。弥生時代後期に属する遺跡としては、一貫東遺跡、大畠遺跡、小原遺跡があげられる。これらの遺跡も基本的には住居址数軒から構成される集落遺跡であるが一貫東遺跡では住居址群の他に土壙墓群、貯蔵穴群が検出されている。弥生時代中期・後期とおして遺跡の占地は同一丘陵に重複することではなく、別々に立地することは興味深い。

次に古墳としては茶山古墳群、一貫東遺跡の古墳群、崩レ塚古墳群、クズレ塚古墳、柳谷古墳、隠里古墳群、植木古墳群、金井古墳群等があげられる。茶山古墳群は全長約21mの前方後円墳1基と円墳1基が現存する。どちらも盜掘を受けている。一貫東遺跡の古墳群は全長約32mの前方後円墳1基と円墳3基、方墳4



第1図 金井別所遺跡位置図



第2図 金井別所遺跡と周辺主要遺跡分布図 (S=1:25,000)

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 1. 金井別所遺跡 | 7. 別所谷遺跡 | 13. 小原遺跡 |
| 2. 西吉田遺跡 | 8. 崩レ塚古墳群 | 14. 隠里古墳群 |
| 3. 茶山古墳群 | 9. クズレ塚古墳 | 15. 植木古墳群 |
| 4. 一貫西遺跡 | 10. 崩レ塚遺跡 | 16. 金井古墳群 |
| 5. 一貫東遺跡 | 11. 柳谷古墳 | |
| 6. 深田河内遺跡 | 12. 大畠遺跡 | |

えられる。崩レ塚古墳群は円墳1基、方墳3基より構成される。クズレ塚古墳は石室現存長約9mを測る円墳である。柳谷古墳は径約8m弱の円墳に小規模の横穴式石室をもつ。銀象嵌頭椎大刀把頭、鞘尾金具を出土したことで著名である。隠里古墳群は3基の円墳より構成される。植木古墳群は円墳2基、方墳3基、金井古墳群は全長約25mの前方後方墳と円墳1基、方墳3基よりそれぞれ構成される。

II 調査経過

1 調査に至る経過

昭和50年6月16日付中国電発岡支総第2023号により、中国電力株式会社岡山支店から津市教育委員会あてに津山市金井地内に新津山変電所建設を計画している旨、埋蔵文化財の調査を実施してほしいとの依頼書が提出された。これを受け津市教育委員会は従前の分布調査結果をもとに検討した結果、事業計画予定地内には現状では埋蔵文化財は認められないが、周辺に古墳、券生土器散布地等が多数確認されており、予定地内にも十分埋蔵文化財が存在する可能性があるとの判断を下した。このため、埋蔵文化財有無の確認調査を実施するよう昭和50年6月26日付津教社第63号で通知した。

確認調査は昭和50年7月7日から7月25日まで実施した。この結果、弥生時代中期の集落、土塹墓、古道等を検出した。同時にこの確認調査結果を昭和50年8月1日付津教社第92号で通知し、本調査を実施することになった。

2 調査体制

本調査は「中国電力株式会社新津山変電所文化財発掘調査委員会」を組織し、昭和50年9月15日から昭和51年4月27日まで実施した。委員会の構成は下記の通りである。

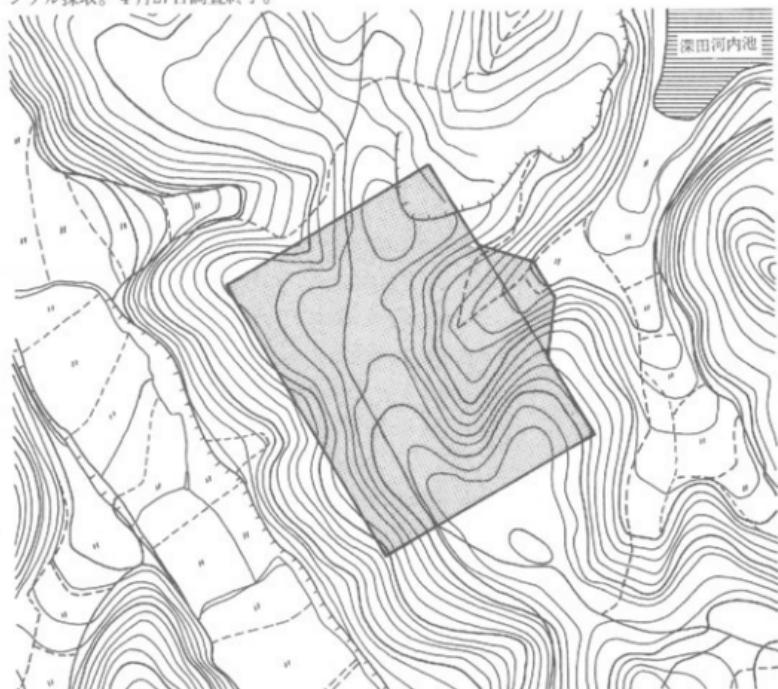
委 員 長	木村岩治	津市教育委員会教育長
副 委 員 長	小林孝男	岡山県教育委員会文化課長
々	森川正利	津市教育委員会教育次長
委 員	西口秀俊	岡山県教育委員会文化課参事
々	光岡鉄郎	津市教育委員会社会教育課長
々	葛原克人	岡山県教育委員会文化財保護主事
々	栗野克己	々
々	須江尚志	津市教育委員会社会教育課文化係長
々	河本 清	々 文化財保護主査
々	湊 哲夫	々 主 事
監 事	安井 熙	中国電力株式会社岡山支店総務部課長
々	光吉勝彦	岡山県教育委員会文化課主任

事務局長	光岡鉄郎	津山市教育委員会社会教育課長
事務局次長	須江尚志	タ 文化係長
事務員	河本清	タ 文化財保護主査
タ 湊哲夫	タ 主事	(役職名はいずれも昭和50年当時)

尚、発掘調査は河本清が担当し、調査補助員国貞圭也が補佐した。整理作業は河本の指導の下に、国貞、光延稻造、村瀬隆、行田裕美、保田義治、小郷利幸があつた。

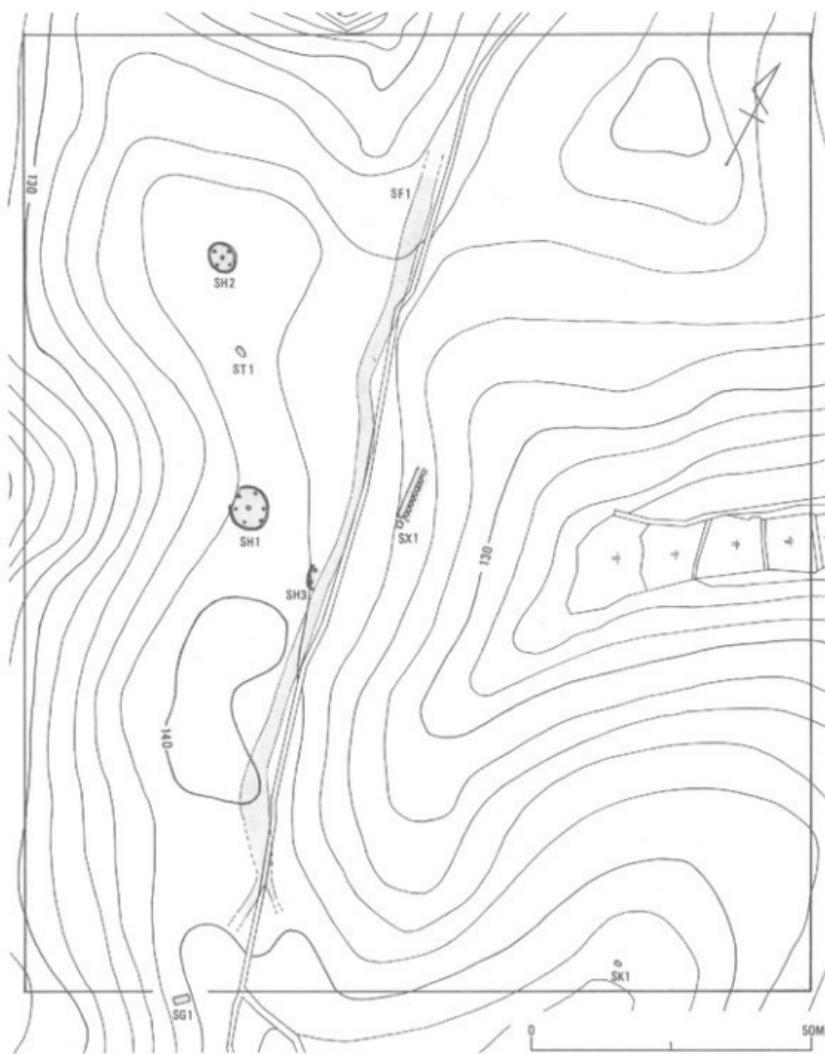
3 調査経過

昭和50年9月1日に調査委員会を発足し、9月15日から発掘調査を開始した。10月22日に第1回の調査委員会を開催し、今後の調査計画の検討を行った。11月12日よりベルトコンベアーを導入し、調査の円滑化を計ると共に、調査方法も全域にトレンチを設定する方法を採用した。12月6日より住居址の掘り下げを開始した。昭和51年1月14日、第2回調査委員会開催。2月4日より窯址の調査開始。3月13日「美作の自然と文化財を守る会」現地視察。3月20日近藤義郎先生視察。3月22日鎌木義昌、水内昌康両先生視察。3月30考古地磁気測定のためのサンプル採取。4月27日調査終了。



第3図 金井別所遺跡周辺地形図 (S=1:3,000)

III 調査の記録



第4図 金井別所遺跡遺構配置図 (S=1:1,000)

金井別所遺跡の調査では弥生時代中期の住居址3軒、段状遺構1基の他、土壙塗、土塙、窯址各1基を検出した。その他にも古道と考えられる溝状遺構もある。以下、各遺構ごとに記述することにする。

1 住居址・段状遺構

住居址1（第5図）

北へ派生する尾根の頂部やや西斜面寄りに立地する。そのため、竪穴住居址の西側壁体の一部は自然傾斜面に切られ、遺存していない。

長径約5.7mの円形を呈する竪穴住居であり、主柱は6本を数える。壁体に沿って壁体溝がめぐり、その床面からの深さは平均10cm弱と浅いものである。また、現状での遺構検出面から、住居址床面までの掘り方の深さは、最深部で約75cmを測る。

6本の柱穴は、その柱穴間距離は等しくならず、全体でいびつな六角形を呈する様に配されている。その中心部には50×70cmの長方形円形を呈する中央穴が位置する。その断面形態は半円状を呈し、床面からの深さは約30cmを測る。底部には炭化物・焼土を多量に混入する淡黒色土が堆積し、上層には、住居址埋土最下層とほぼ同一の黄色細砂土が流入している。中央穴の短辺両側には、柱穴様小ピットがそれぞれ検出された。

住居址1は火災により廃棄されたものであると考えられる。住居址埋土各層には、焼土塊・焼土粒・炭化物が少なからず混入していた。また、中央穴西側床面にはかなり顕著に炭化材が遺存しており、その中央部分には焼上面が形成されていた。

住居址1出土土器（第6図）

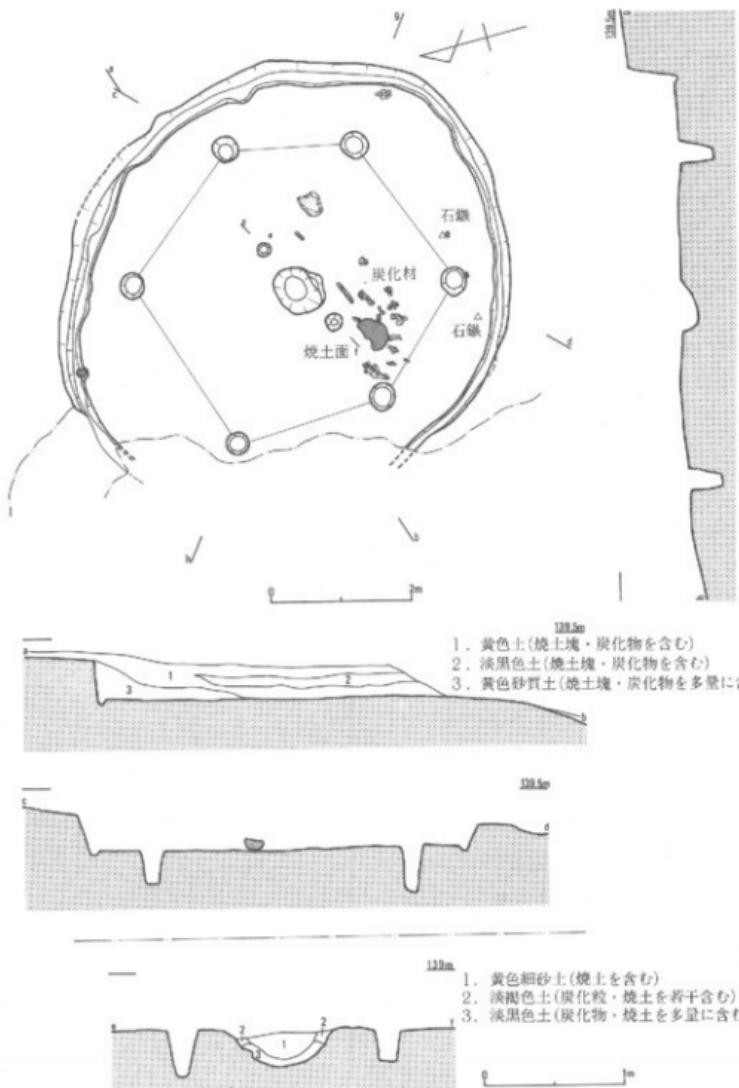
図示できるものは變形土器1点のみである。

口縁部は「く」の字状に外反し、ほとんど肥厚しない端部をもつ。端部はわずかに上方につまみ上げており、端面には凹線はみられない。屈曲部はかなり急になり、内面には稜がめぐる。口縁部径は15cm弱、最大径は胴部やや上位にあり20cm程度を測る。底部は遺存せず高さは不明である。外面の調整は、上位部は層状剥離が著しく不明であるが、最大径部付近はタテ方向のハケ目で、胴下半部にはタテ方向のヘラミガキが施される。内面はハケ目調整後、ナデている。特に最大径部付近には指頭押圧痕が顕著である。底部付近にはヘラケズリ状の痕跡が認められた。

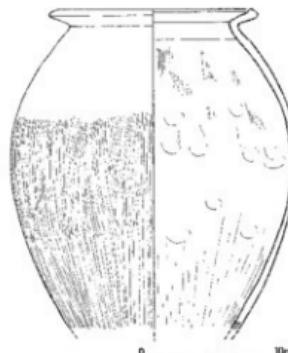
住居址1出土石器（第7図）

石鏸3点、スクレイパー1点が出土している。

1～3はいずれもサスカイト製の石鏸である。1・2は平基の三角形を呈するものであり、



第5図 住居址1平面・断面図
(平面 a-b・c-d・g-h、断面 S=1:80 e-f、断面 S=1:40)



第6図 住居址1出土土器 (S=1:4) 著しいため、石錐の欠損品である可能性も指摘できる。

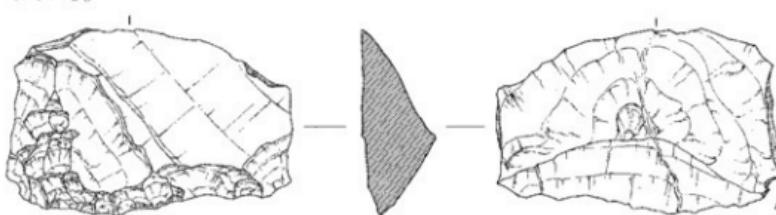
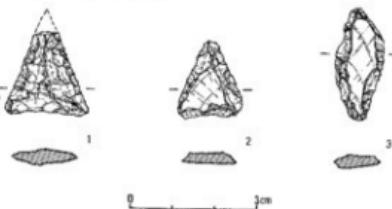
4は流紋岩製のスクレイパーであり、壁体溝埋土より出土した。幅6.8×長4.5×厚1.8cmを測る。不定形剥片を利用しておらず、主要剥離打面側から数回の小剥離を施し、それを刃部としたスクレイパーに仕上げている。

住居址2 (第8図)

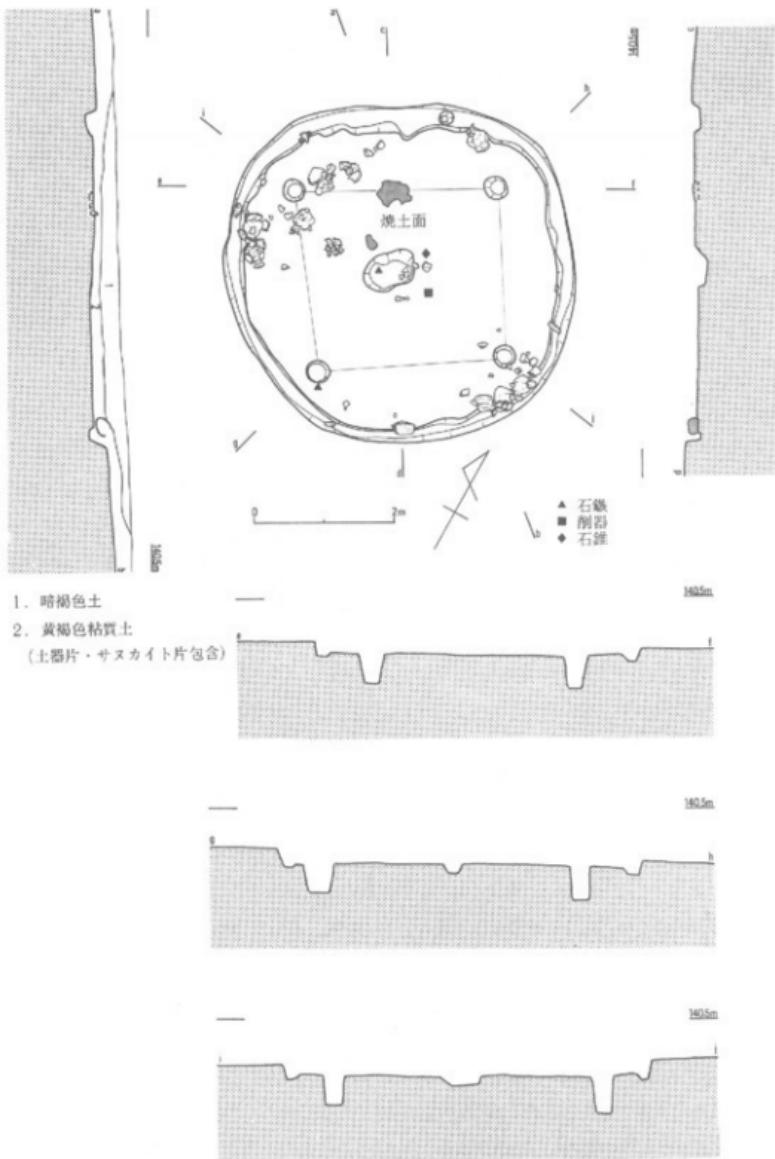
北へ派生する尾根の頂部平担面に立地し、住居址1の北北西ほぼ40mに位置する。

径4.4mの隅丸方形に近い円形竪穴住居で、主柱は4本により構成される。全体的に上層の流出が著しく、遺構検出面から床面までの深さは約20cm程である。

柱穴はほぼ等間隔に、正方形を呈する様に配されており、その中心には50×80cmの楕円形を呈し深さ約10cmを測る中央穴が位置する。壁体には床面から5~10cmの深さをもつ壁体溝が全周にめぐる。また、床面北東部の北主柱穴と西主柱穴のほぼ中間に焼土面が形成されている。



第7図 住居址1出土石器 (S=2:3)



第8図 住居址2平面・断面図 (S=1:80)

住居址 2 の床面上からは良好な一括遺物が出土した。その分布は大きく 2 箇所のまとまりを示している。1つは西主柱穴周辺であり、壺形土器を主体とし、住居址西角壁体にもたれかかった状態で出土している。またもう 1 つは対する東角部分であり、これも数個体の壺形土器を主体として一括出土している。他には、北角部分に壺形土器が 1 点出土しており、いずれの土器もほとんどは壁体寄りに分布している。一方、石器は中央穴内埋土中、もしくはその周辺に多く分布している。

住居址 2 出土土器 (第 9 ~ 12 図)

図示できる土器は 25 点であり、ほとんど全てが床面上の一括出土土器である。

壺形土器 (第 9 ~ 11 図)

調整については共通性が指摘できるものの、形態・文様構成等においては大変バラエティに富んでいる。

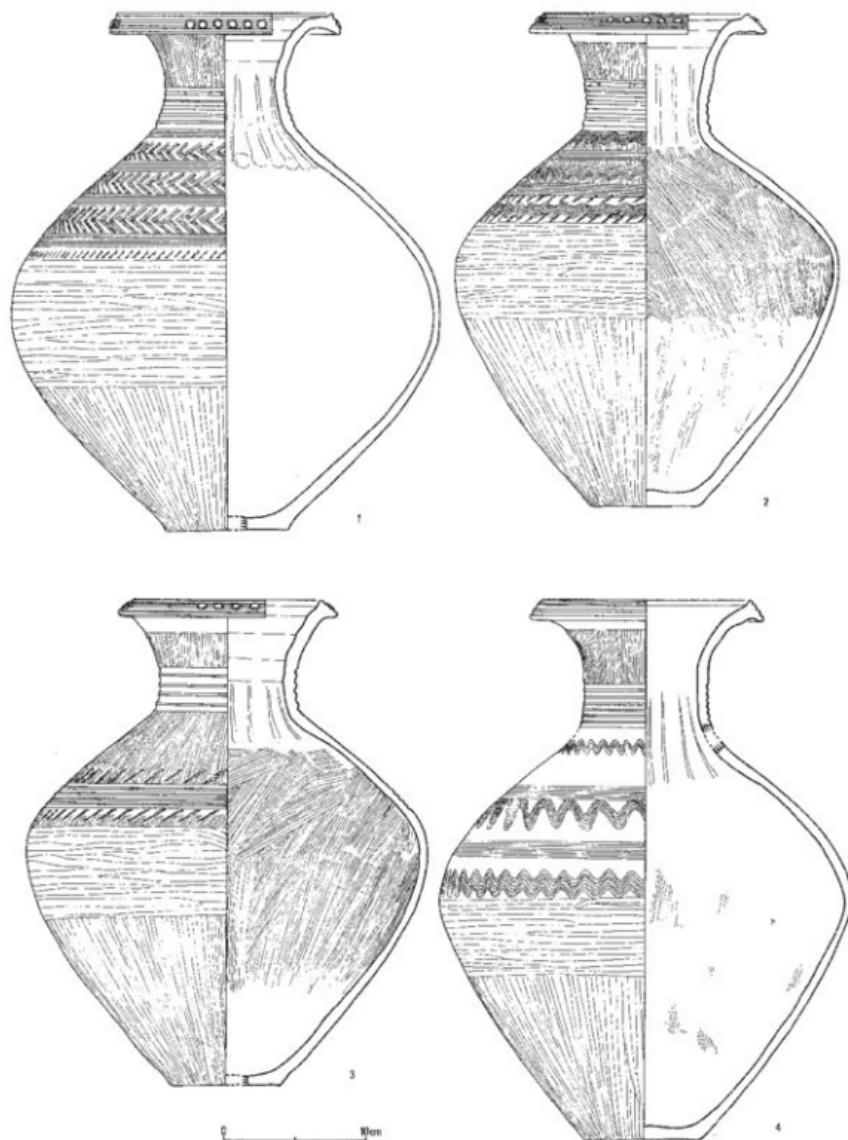
まず、外面調整は頸部から胸部上半にかけてはタテハケであり、口縁部周辺をヨコナデで仕上げている。また、胴部下半にはタテ方向のヘラミガキが施され、6 の例外を除けば全て上半をヨコ方向のヘラミガキで切っている。内面調整は、胴部においては概してタテ及びナナメ方向のハケ目であるが、2・6 の様に下半部はユビによるナデ上げにより、かなり器面を削り取る調整法も認められる。頸部・口縁部はヨコナデであり、頸部内面にはしづり痕が認められる。

1 は胴部中位に最大径をもち、頸部は一定の径で直立せず、緩やかに外反し、口縁部に至る。端部は肥厚させ、やや上方につまみ上げている。端面には 3 条の凹線文と円形浮文で加飾している。頸部下位には 6 条の粗い凹線文が施され、その下位には櫛描直線文と櫛描綫杉様文が交互に 7 段の文様帶を形成する。更にその下位には板状工具の小口による連続刺突文がめぐる。

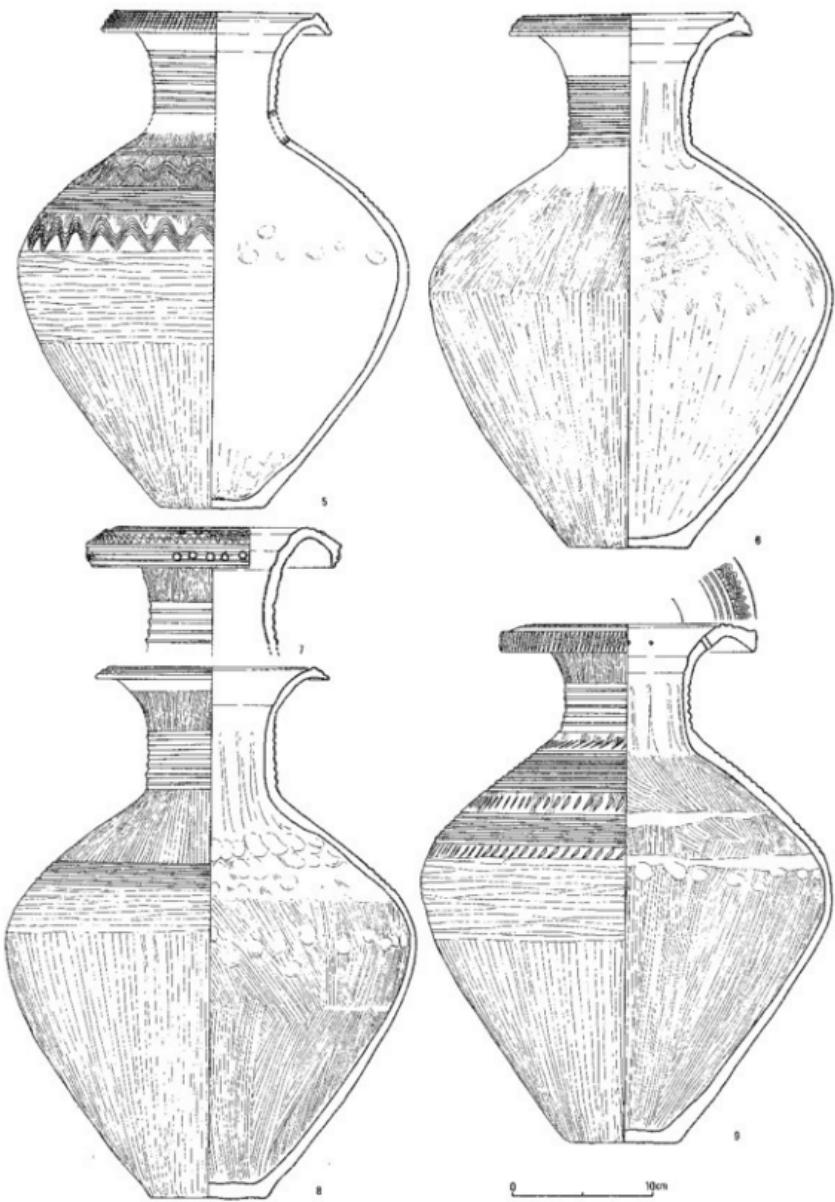
2 はやや外反気味に直立した頸部から外方へ拡張し、やや上方へつまみ上げた口縁端部をもつものである。端面には凹線文と円形浮文が施されている。頸部下位には 7 条の粗い凹線が施され、その下位には櫛描波状文と櫛描直線文が交互に 5 段の文様帶を形成する。最下段の櫛描波状文の上下それぞれ 2 段に、板状工具による連続刺突文がめぐる。

3 はやや外反気味に直立した頸部からそのまま口縁部に至るもので、端部はやや外方へ拡張する。端面は凹線文と円形浮文により加飾される。頸部下位には 4 条から成る粗い凹線文が施される。文様帶は胴部上半中位にあり、数条の凹線文と、その上下にめぐる板状工具の小口による連続刺突文により構成される。

4 は直立した頸部の上半が外反して口縁部に至るもので、端部はやや上下に拡張をみせる。端面には 3 条の凹線文をめぐらせる。頸部下位にはやや粗い凹線文が 7 条施される。文様帶は櫛描波状文と櫛描直線文が交互に 5 段施されることにより構成されているが、2 段目の直線文と 3 段目の波状文の切り合いで、まず波状文が施され、後に直線文がめぐらされたことが観察された。



第9図 住居址2出土土器〔1〕 (S=1:4)



第10圖 住居址2出土土器〔2〕 (S-1:4)

5は頸部が直立した後、緩やかに外反したもので、端部は下方に拡張し、上方にややつまみ上げている。端面には3条の凹線文を施した後、板状工具小口による連続刺突文で加飾している。頸部中位から下位にかけて粗い8条の凹線文がめぐる。胸部と頸部の屈曲部や下位に櫛描直線文が、胸部上半中位には6条からなる細かい凹線文が施されている。凹線文の上下は櫛描波状文で加飾されている。

6は直立した頸部から緩やかに外反し口縁部に至るもので、端部は上下にやや拡張をする。端面には3条の粗い凹線文がめぐる。頸部には中位から屈曲部まで11条の細かい凹線文で加飾され、胸部上半には他に見られる様な文様帶は施されていない。また、胸部下半上位のヨコ方向のヘラミガキも認められず、やや新しい要素の強いタイプである可能性が高い。

7の頸部は緩やかに外反しながら口縁部に至り、外方に大きく拡張をみて端部は下方に垂れ下がるものである。文様帶は、外方に拡張した上部端面と、下方に垂れ下がった端面に認められる。前者には3条の凹線文と櫛描波状文に挟まれて円形浮文が施されており、後者には3条の凹線文の後、円形浮文による加飾が施されている。頸部には粗い凹線文が4条まで確認できたが、それより下位は遺存せず不明である。

8は頸部が直立した後、緩やかに外反し、口縁端部は外方に拡張するものである。端面には3条の凹線文がめぐる。頸部には中位から屈曲部にかけて7条の粗い凹線文が施されている。文様帶は胸部上半中位に1段のみ細かい凹線文が施されている。

9は直立した頸部の上半から外反し、端部はやや垂れ下がり気味に肥厚しながら外方へ大きく拡張するものである。端面には板状工具の小口による連続刺突文が、拡張上部端面には2条の凹線文と櫛描波状文が施される。頸部には6条から成る粗い凹線文がめぐる。胸部上半の文様帶は板状工具小口による連続刺突文と、数条の細かい凹線文が交互に計5段施されている。頸部上位には2箇所並んで穿孔が認められる。

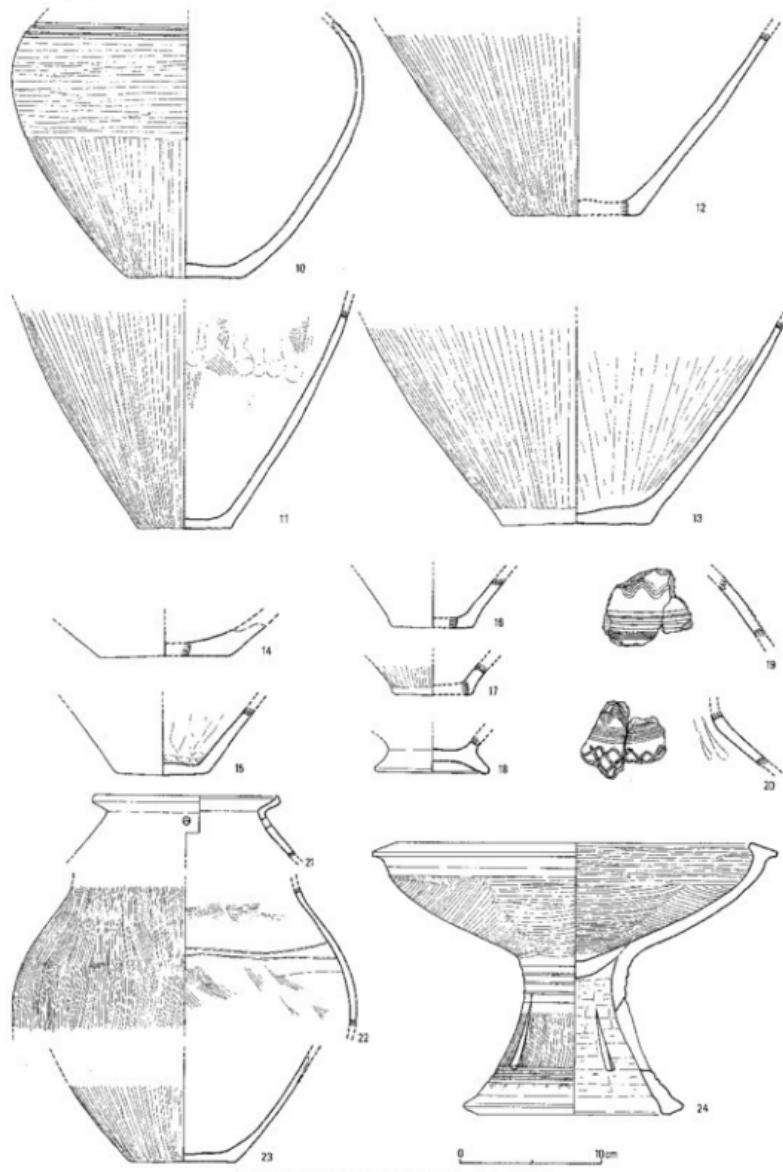
10は壺形土器の胸部下半であり、最大径や上位に数条の凹線文が認められる。外面調整はタテ方向のヘラミガキを、その上半をヨコ方向のヘラミガキで切っている。内部は層状剝離が著しく不明である。

壺形土器 (第11図)

21は口縁部である。「く」の字状に外反し、端部はやや上方につまみ上げている。屈曲部や下位に1箇所穿孔が認められる。調整は、口縁部はヨコナデであるが、下位については層状剝離が著しく不明である。

22は胸部上半である。壺形土器とは異なり、最大径部は銳角に張り出さない。外面調整はタテ方向のハケ目、内面調整はヨコもしくはナメ方向のハケ目調整後、ユビによるナデが施されている。

23は底部片である。底部からタテ方向のヘラミガキが施されている。内面は層状剝離が著しく不明である。



第11図 住居址2出土土器〔3〕 (S=1:4)

高杯形土器 (第11図)

浅い椀状を呈する杯部は緩やかに外反し、端部は内外相方へ拡張し、端面はやや内傾する。外面はタテハケの後、緩い弧状を呈するヨコ方向のヘラミガキで、6単位で一周する。内面もヨコ方向のヘラミガキが施されるが、上位はその後ヨコヘラミガキが全周に施される。底部は円盤充填による。脚部はラッパ状に開き、端部は肥厚しやや外方に拡張を示す。外面はタテ方向のハケ目、内面は反時計回りのヘラケズリであり、端部周辺はナデ仕上げされている。脚部中位には不規則的に6箇所に三角形のスカシ孔が認められた。脚部上位の杯部との屈曲部下位には粗い4条の凹線文が、スカシ孔下端部周辺には3条の細かい凹線文が施されている。

器台形土器 (第12図)

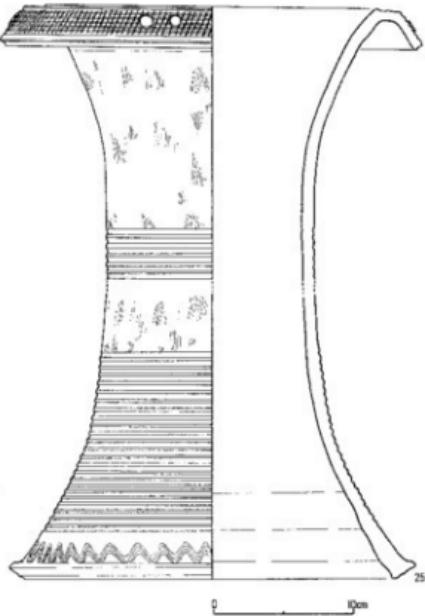
胴部中位は直立するが、上位・下位それぞれ緩やかに外反し、脚部は肥厚し外方に拡張した端部をもち、口縁部は肥厚せず外方に拡張し更に下方へ垂れ下がったものである。口縁部には垂下した面上に数条の凹線文を施し、板状工具小口の連続刺突文をめぐらせ、円形浮文で加飾した文様帶が形成されている。筒状胴部の外面の地文はタテ方向のハケ目であり、磨滅が著しく不明な部分が多いが、一部にその痕跡が観察された。胴部中位に数条、中位下半から下位下半にかけて二十数条の凹線文がめぐらされている。また、脚端部やや上位には櫛描波状文が施されている。

その他の土器 (第11図)

11~17は壺形土器もしくは甕形土器の底部片である。外面はいずれもタテ方向のヘラミガキが施され、13・17の様に底部周辺のみ、ヘラミガキをナデ消しているものも認められる。内面は崩状剥離が著しく不明なものも多いが、11はタテ方向のハケ目の後、ユビによるナデを施しており、また13はユビによる強いナデ上げで砂粒の移動が認められる。

18は台付壺形土器もしくは台付甕形土器の台部である。比高は低く、端部は丸く仕上げている。調整はヨコナデである。

19・20は壺形土器の胴部片である。19には櫛描波状文と細かい凹線文が認められる。20は胴部と頸部の屈曲部付近の破片であり、内面にはしづら痕が認められ



第12図 住居址 2出土土器 [4] (S=1:4)

る。外面には櫛描波状文、櫛描直線文、3本から成る櫛描格子目文が認められる。

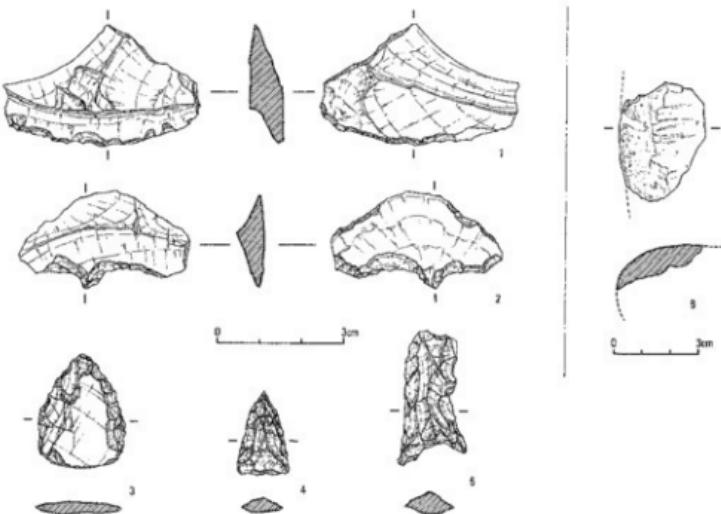
住居址 2 出土石器 (第13図)

1はサスカイト製スクレイパーである。不定形に剝離された剝片の長辺に、両面から数回の小剝離を行い刃部を形成したものである。

2はサスカイト製石錐である。寸詰まりな横長剝片の主要剝離面打点部に先端部を作り出す様に扇形に両面から小剝離を施し整形したものである。また、突起部縁辺はやや磨滅している。

3～5はサスカイト製石鎌である。3は縁辺部のややふくらむ平基石鎌であり、刃部形成の小剝離は縁辺部のみに限られ、両面とも中央に大きく素材面を残している。 $2.7 \times 2.0 \times 0.3$ cmを測る。4は縁辺が直線的に先端部へ至る平基石鎌である。両面とも縁辺から精緻な小剝離が施され、断面形は菱形を呈する。 $2.0 \times 1.3 \times 0.3$ cmを測る。5は凹基石鎌である。両縁辺からはかなり多くの小剝離が施されているが、形態は、両側辺が平行し、先端は直線で尖らない。小剝離が他2者よりもやや大き目であること等から、石鎌未製品である可能性も指摘できる。 $3.2 \times 1.5 \times 0.7$ cmを測る。

6は石斧の欠損品である。側面には研磨痕が、縁辺には敲打痕が多く認められる。 3.2×4.2 cmの小破片であるが、石斧使用時に剥落したものである。よって、石斧の復元値は不明である。石材は緑色片岩である。



第13図 住居址 2 出土石器 (1～5 S=2:3、6 S=1:2)

住居址3 (第14図)

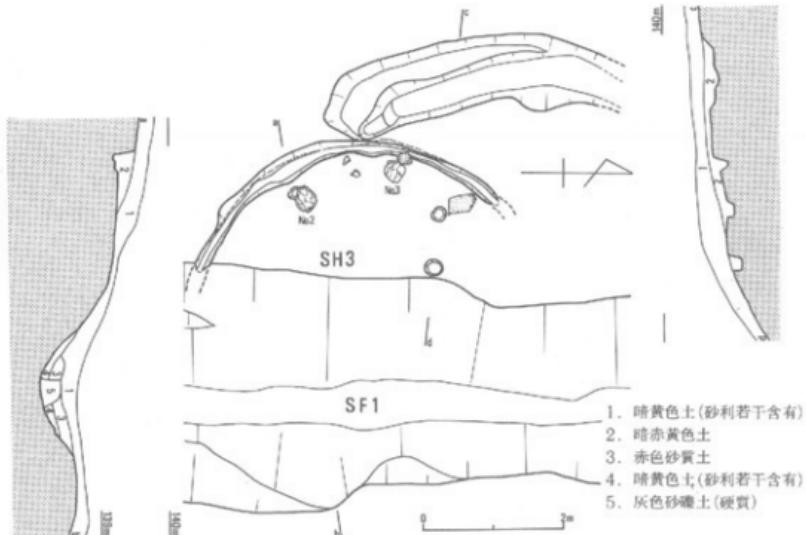
尾根の頂部に位置し、東側の谷に面して立地する。住居址1との距離は東へ約10mを測る。中世の古道に東半分を切られており、現状では3分の1程しか遺存していなかった。

平面形は円形を呈し、推定復元径4.5mを測る竪穴住居である。わずかに壁体溝が半円状にめぐらしている。現状での竪穴の掘り込みの深さは25cmを測る。柱穴は3つ検出された。中央穴は認められず、中世古道に切られてしまったものと考えられる。住居址壁体西側の山寄りには溝が検出されているが、住居址3と埋土は同一（暗赤黄色土）であるものの、切り合い関係も認められず不明である。

住居址床面には大型礫が2個と、壁体溝付近から数個体分の土器が出土している。

住居址3出土土器 (第15図)

1・2は壺形土器である。1は口縁部片である。肥厚せず垂れ下がり気味に外方へ拡張し、端部はややつまみ上げ、ほぼ等間隔に刻み目を施している。上部平坦面には櫛描波状文2列に凹線文1条で加飾している。2は口縁部と頸部を欠いている。最大径はやや低く、緩やかに頸部に至る。屈曲部から最大径部までが文様帶となっており、櫛描波状文と櫛描直線文とが交互に6段めぐる。更に数条の凹線文と櫛描波状文とが交互に3段めぐり、最大径部には板状工具の小口による連続刺突文が施され、計10段により1つの文様帶が構成されている。胴部上半の



第14図 住居址3平面・断面図 (S=1:80)

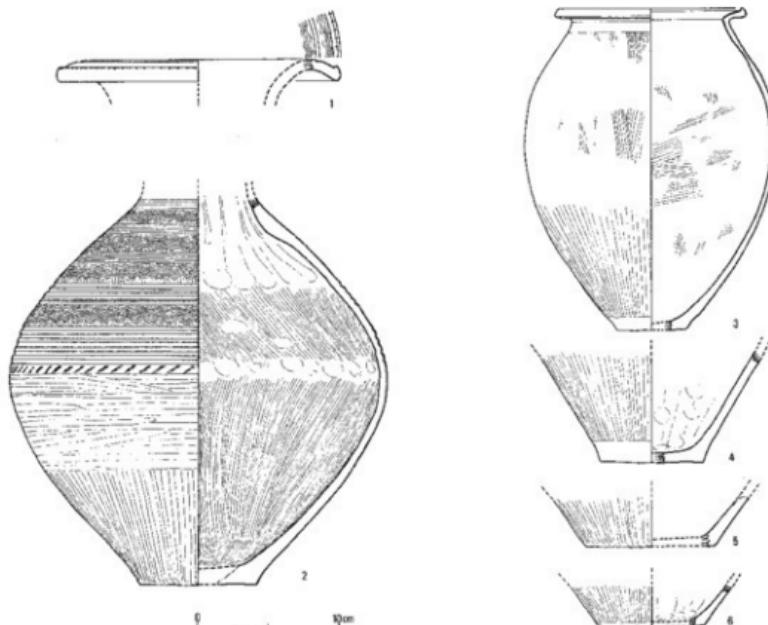
地文はタテ方向のハケ目で、下半はタテ方向のヘラミガキ後、更に上半にヨコ方向のヘラミガキが施される。内面はタテ方向のハケ目で、最大径部及び屈曲部周辺にはナデもしくは指頭圧痕が認められる。また、頸部に至る部分にはしづり痕が観察された。

3は壺形土器である。「く」の字状に外反した口縁部は、ほとんど肥厚しない上方にわずかにつまみ上げただけの端部をもつ。全体的に層状剥離が著しい。外面調整は上半がタテ方向のハケ目、下半がタテ方向のヘラミガキであるが、底部付近はナデ消されている。内面調整は最大径部付近はヨコ方向、下位はタテ方向のハケ目が認められた。

4～6は壺形土器もしくは壺形土器の底部片である。外面はいずれもタテ方向のヘラミガキであるが、4・6の底部付近はナデ消されている。内面の磨滅が著しく不明な部分が多いが、4・6では底部からのナデあげの痕跡がわずかに確認された。

段状遺構1 (第16図)

住居址1と住居址2の丁度中間に位置する。地山を断面「L」字状に削平し床面に焼土面をもつことから「段状遺構」として一括して理解されているものである。平面形は北西部ではほぼ直角に屈曲し、西側から東側にかけては自然傾斜面に解消されてしまっている。長さ1.9m、幅



第15図 住居址3出土土器 (S=1:3)

1.1mを測る。現状での掘り込みの最深部は15cmを測る。

床面には土器片多数と共に炭化物・焼土集中地点がかなり広く認められ、その中心には径15~20cmの焼土面が形成されている。

土器片はほぼ一括して出土している。

段状遺構1出土土器（第17~18図）

壺形土器（第17図）

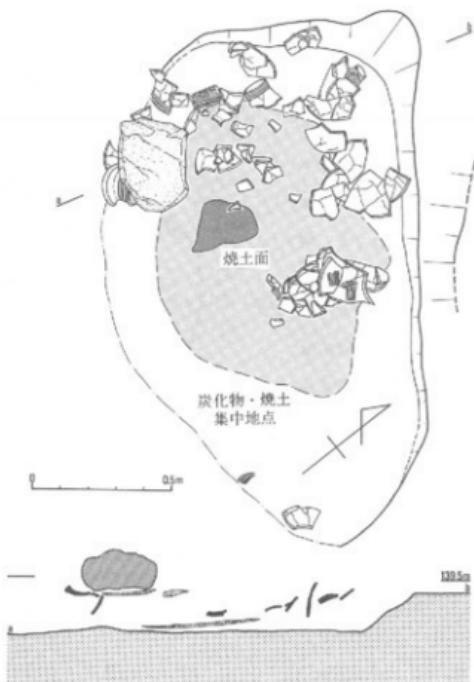
1は胴部下半、2は口縁部を欠いている。

1は直立した頸部からやや急に外反し、上下に拡張した口縁部をもつ、端面には3条の凹線文と円形浮文による加

飾が施されている。頸部下半には6条からなる粗い凹線文がめぐる。胴部上半には文様帯が形成されている。上位から櫛描波状文、櫛描直線文、櫛描斜線文、櫛描直線文、櫛描波状文2段の計6段で構成される。頸部以下はタテ方向のハケ目であり、文様帯より下位は磨滅が著しく不明である。内面は口縁部及び頸部がヨコナデであり、頸部にはしづり痕が認められるが、胴部は層状剥離が著しく不明である。2は緩やかに外反しながら直立した頸部をもつ。その下位には肩曲部に至るまで9条から成るやや粗い凹線文がめぐり、更にその下位には櫛描波状文が1段施されている。胴部最大径はやや上部にあり、胴部上半中位に9条の細かい凹線文が施され、その下位に2段の櫛描波状文がめぐり最大径部に至る。調整は外面が頸部上半から胴部上半にかけてがタテ方向のハケ目、胴部下半がタテ方向のヘラミガキで更にその上半をヨコ方向のヘラミガキで切っている。内面は頸部から胴部上半にかけてタテ方向のハケ目が認められ、底部はユビによるナデ上げの痕跡が観察された。

壺形土器（第18図）

2つのタイプが認められる。1つは3で、最大径を胴部やや上位にもち、「く」の字状に外反



第16図 段状遺構1平面・断面図 (S-1:20)

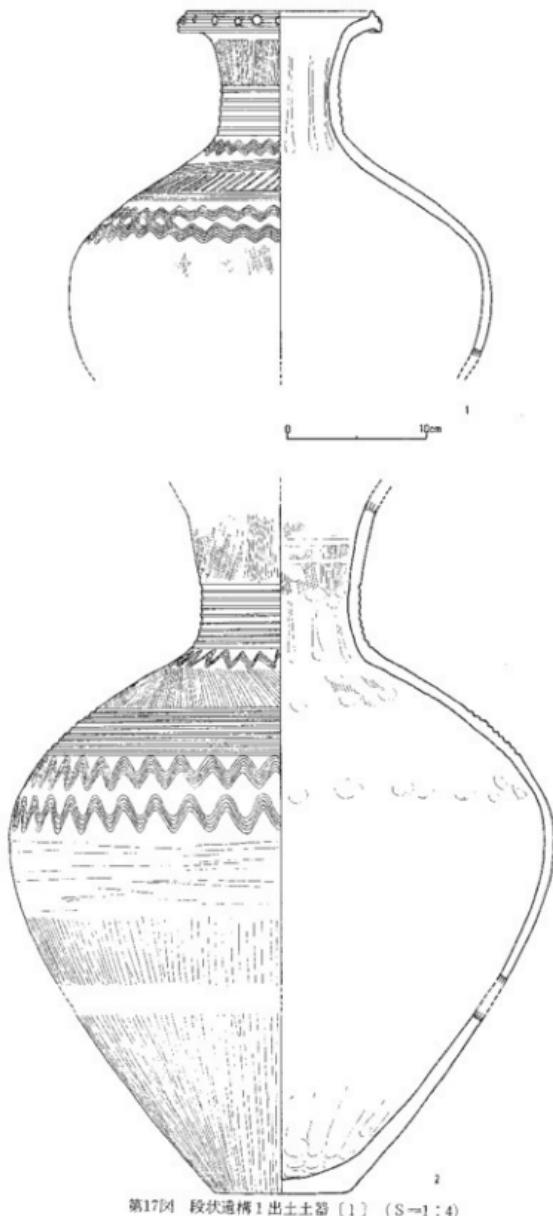
し上下に拡張した口縁端部をもつものである。端面には凹線文と板状工具の小口による連續刺突文で加飾される。また、最大径部や上位に2段の板状工具による連續刺突文がめぐる。地文は外面が細かいタテ方向のヘラミガキ、内面がタテ方向のハケ目で、口縁部は内外面ともヨコナデである。

もう1つは4・5であり、肥厚せず「く」の字状に外反し、端部は上方にわずかにつまみ上げただけのものである。4には屈曲部やや下位に2つ相並んで小穿孔が認められる。内面にはユビによるナデ上げの痕跡が観察された。5は外面にわずかにタテ方向のハケ目の痕跡が認められた。胴部中位にはヘラ状工具による連續刺突文がめぐる。

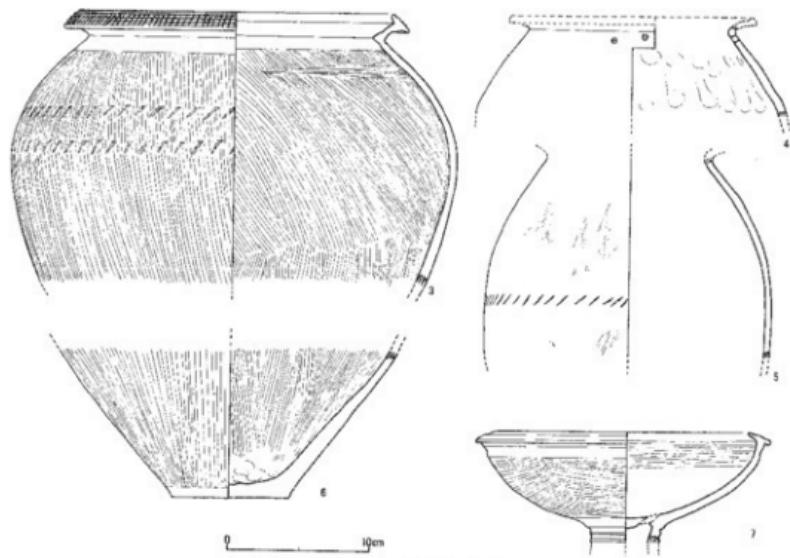
6は壺形土器もしくは甕形土器の底部である。外面はタテ方向のヘラミガキで底部付近をナデ消している。内面はタテ方向のハケ目で底部には多数の指頭圧痕が認められた。

高杯形土器（第18図）

緩やかに外反し浅い橢形



第17図 段状造構1 出土土器〔1〕 (S=1:4)



第18図 段状遺構1 出土上器〔2〕 (S=1:4)

を呈する杯部の口縁部は、内外相反へ拡張し、端面はやや内傾する。外面は緩い弧状を描くヨコ方向のヘラミガキで、内面は中位以上にヨコ方向のヘラミガキが認められ、口縁部はヨコナデで仕上げられている。底部は円盤充填による。杯部と脚部の接合部外面には粗い凹線文がめぐる。

段状遺構1 出土石器 (第19図)

石鏃が2点出土している。いずれも基部をわずかに凹めた平基の三角形を呈するサスカイト製のものである。

1は先端部をわずかに欠損し、 $1.5 \times 1.5 \times 0.2$ cmを測る。表面には素材剥離面をかなり残しており、また縁辺からの剝離の単位は大きい。

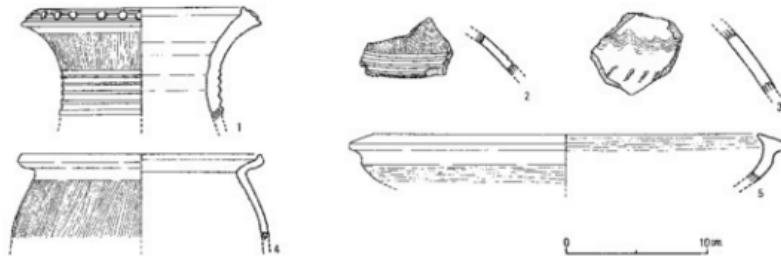
2は先端部と脚部片方をわずかに欠損し、 $1.2 \times 1.5 \times 0.3$ cmを測る。1に較べ基部をかなり凹めているため、凹基石鏃として把えられる可能性もある。縁辺からの小剝離が著しく、素材剥片の平坦面は残存していない。



遺構に伴わない土器 (第20図)

1は壺形土器の口縁部である。頭部から外反しながら口縁部に至り、端部はやや肥厚させ上方にわずかにつまみ上げる。端面には3条の凹線

第19図 段状遺構1
出土石器 (S=2:3)



第20図 遺構に伴わない土器 ($S=1:1$)

文と円形浮文により加飾される。頸部の外面は、タテ方向のハケ目地文の上に粗い凹線が6条以上めぐる。住居址2出土の3(第9図)と類似する。

2・3は壺形土器の文様帶の破片である。2にはハケ目地文の上に数条の凹線文が施されており、3には櫛描波状文とその下位に板状工具の小口による連続刺突文がめぐらされている。

4は壺形土器である。「く」の字状に外反した口縁部は肥厚せず、端部は上方にややつまみ上げただけのものである。外面の調整はタテ方向のハケ目である。

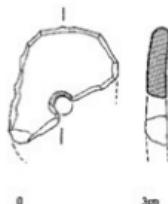
5は高杯形土器の杯部口縁部片である。端部は内外相反に拡張し、端面はやや内傾する。磨滅が著しく調整の詳細な観察は不能であるが、内外面ともわずかにヨコ方向のヘラミガキが認められた。

遺構に伴わない土製品 (第21図)

土器片を再利用した紡錘車である。3分の1を欠損しているが、 $2.8 \times 2.6\text{cm}$ を測る円盤のはば中央に径約5mmの穿孔が認められる。厚さは約5mmを測る。

遺構に伴わない石器 (第22図)

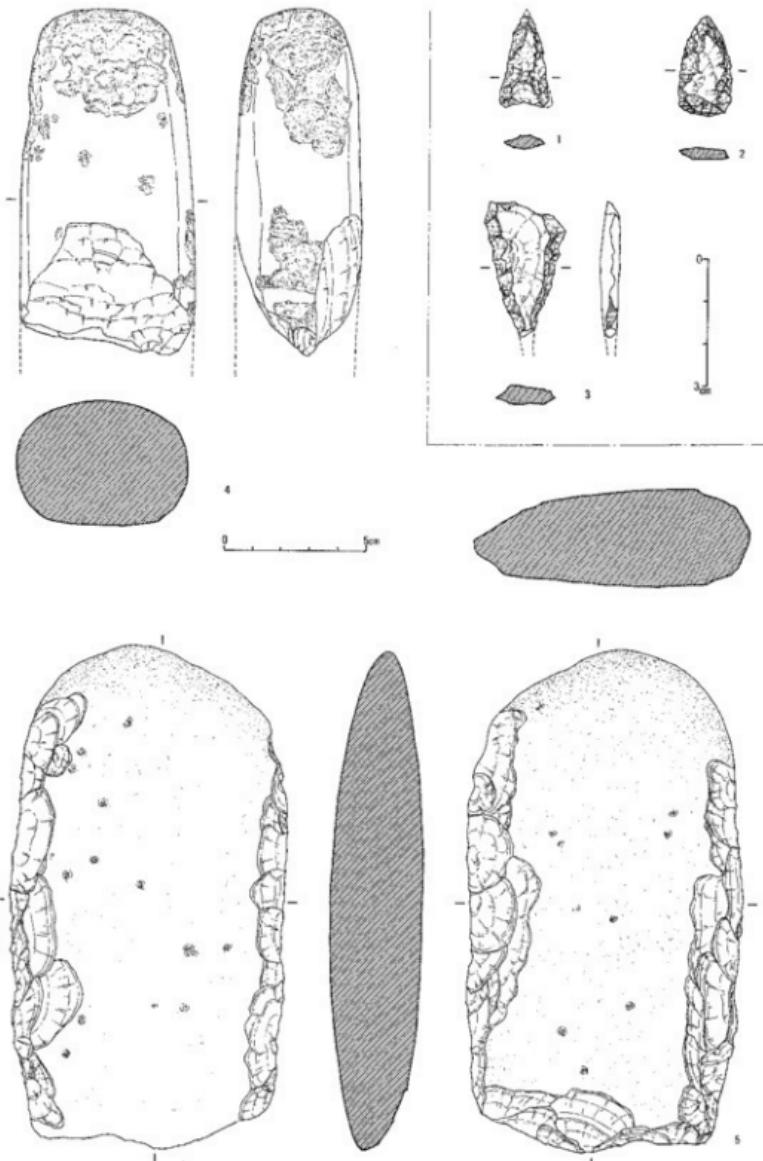
1・2はサヌカイト製石鏃である。1は基部をやや凹めた平基石鏃で縁辺は直線的に先端部へ向かう。縁辺部整形の剥離単位は大きい。表面に素材剥離面を残している。 $2.2 \times 1.2 \times 0.3\text{cm}$ を測る。2は $2.4 \times 1.2 \times 0.3\text{cm}$ を測る平基石鏃である。縁辺はややふくらみながら先端部へ向かう。表面に素材剥離面を多く残している。



3はサヌカイト製石錐である。逆三角形を呈し、縁辺に両面から小剝離を施して整形している。表裏両面には素材剝離面を多く残している。先端部は欠損しているが、その縁辺部の一部は磨滅している。 $3.2 \times 1.9 \times 0.5\text{cm}$ を測る。

4は磨製石斧である。刃部は欠損している。頭部には敲打痕が認められる。残存 $11.2 \times 6.2 \times 4.5\text{cm}$ を測る。5は $18.0 \times 10.0 \times 3.5\text{cm}$ を測り、縁辺部

第21図 遺構に伴わない
土製品 ($S=2:3$)



第22図 造標に伴わない石器 (1~3 S=2:3、4~5 S=1:2)

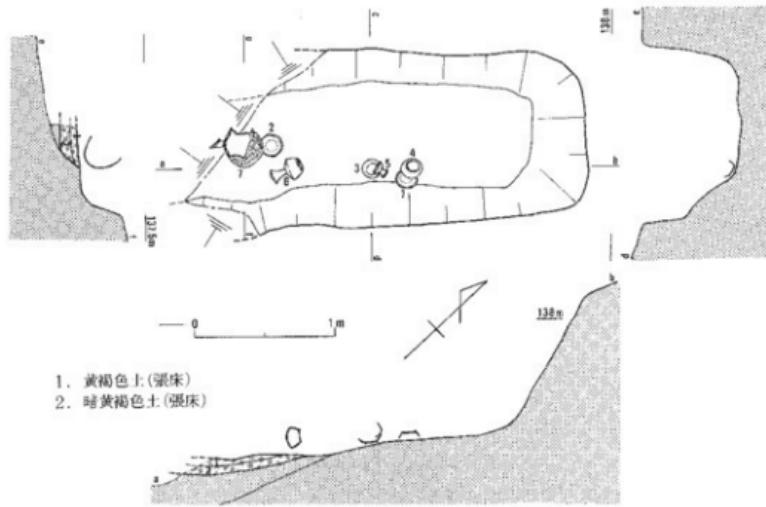
に両面から剝離を行っている。いずれも表面には研磨面は認められない。器種は不明である。

4・5とも石材は不明である。

2 土壙墓・土壙

土壙墓 (第23図)

調査区の南端に単独で位置する。掘り方の平面形は方形を呈するが、南側部分の4分の1程度はすでに流出しており遺存していなかった。規模は掘り方上面で短辺120cm、残存長280cm、床面で短辺70cm、残存長240cmを測り、掘り込みの深さは、北側最深部で約90cmを測る。本土壙墓は斜面に掘りこまれているため、斜面下位の南側部分は張り床によって床面の水平を保たせている。張り床土は2層から構成されており、上層は黄褐色土(1層)、下層が暗黄褐色土(2層)である。墓壙内埋土は数mmの砂粒を含む淡黒色土の单層である。床面には須恵器が7個体置かれていた。須恵器の器種組成は杯蓋2、杯身2、高杯1、長頸壺1、甕1であり、甕の口縁部が一部欠損している他はいずれもほぼ完形品である。須恵器の出土地点は、東側壁側中央と南北小口側の2群に大きく分かれる。前者は杯蓋1、杯身3・4、高杯5の4個体により構成されており、杯蓋1と杯身4とはあたかもセット関係を示すかのように重なって出土している。後者は杯蓋2、長頸壺6、甕7の3個体により構成されているが、そのすぐ南側から流出を受けているため、本来の組成を示しているものではない可能性もある。さらにこの甕は口縁部を打ち欠かれており、底部には焼成後の穿孔が認められた。



土壙墓出土土器（第24図）

出土土器はいずれも須恵器で、杯蓋2、杯身2、高杯1、長頸壺1、甕1の7個体である。

1・2は杯蓋である。1は口径15.2cm、器高3.3cm、2は口径14.6cm、器高3.6cmを測る。天井部はやや丸味をもち、中央には扁平な基石状のつまみが付けられている。1のつまみの頸部はやや内側に凹んでいる。外面は上半が回転ヘラケズりであり、ロクロ回転方向は時計回りである。外面下半と内面、つまみ部分はヨコナデである。口縁部は折り返され、断面は逆三角形を呈し、端部は丸くおさめている。いずれもやや歪んでいる。

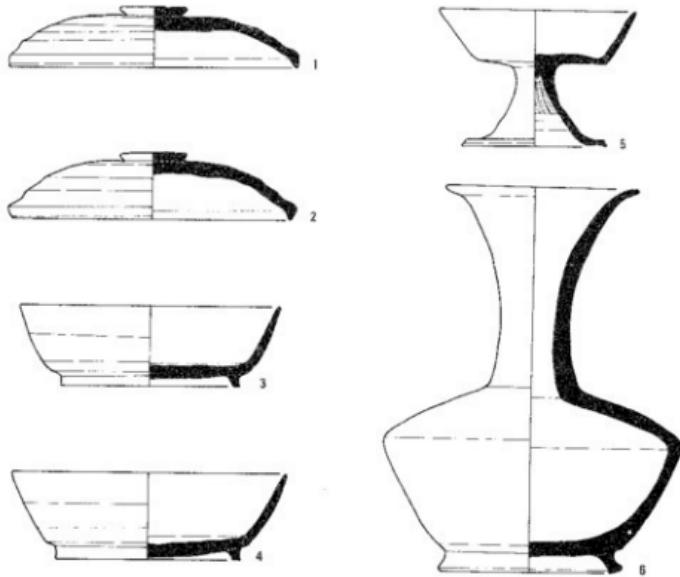
3・4は杯身である。いずれも貼付け高台がつく。3は口径14.6cm、高台径9.0cm、器高4.7cm、4は口径13.8cm、底部径8.8cm、器高4.3cmを測る。体部は底部との屈曲部からやや直線的に斜方向へ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。底部には回転ヘラケズリが施されており、ロクロ回転方向は時計回りである。内面と体部外面、高台はいずれもヨコナデ仕上げである。4はやや歪んでいる。

5は高杯である。口径10.4cm、脚部径7.8cm、器高7.4cmを測る。杯部は水平な底部との屈曲部から外上方に向かって直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめている。脚部は「ハ」の字状に外反し、裾部で大きく水平方向に開き、端部外面には面を持たせ浅い凹みがめぐる。また、内面上半にはしづり痕が認められる。調整は杯部、脚部の内外面とも概してヨコナデである。

6は長頸壺である。貼付け高台がつく。口径10.4cm、胴部最大径16.8cm、高台径8.4cm、器高20.7cmを測る。頸部から口縁部にかけては緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。胴部と肩部の境界は最大径部にあたり、やや丸味をもちなながら屈曲し明瞭な棱線はもない。貼付け高台は「ハ」の字状を呈し、壺部は斜方向に面をもち内外相方につまみ出している。調整は概してヨコナデ仕上げである。口縁部は一部に歪みがみられ、外面には自然釉が認められる。

7は甕である。口径15.4cm、胴部最大径29.1cm、器高26.8cmを測る。口縁部は「く」の字状に上方へ短かく立ち上がり、壺部は内側にややつまみ出している。胴部は球形に近く、最大径部はやや上位にある。丸底の底部ほぼ中央には焼成後の橢円形を呈する穿孔が認められる。胴部外面には平行タタキ目痕が、内面には同心円文のタタキ目痕が観察される。口縁部周辺はヨコナデ仕上げである。

以上、出土土器の概略を説明してきたが、これらから本土壙墓の所属時期について推察してみたい。県北においては須恵器窯址による編年は行われておらず、唯一「稼山遺跡群」（註1）で試みられているのみである。よって、本土壙墓の須恵器を稼山編年に対比させると、杯蓋・杯身の形態等からみて、稼山6式の時期が考えられる。その他の器種組成も矛盾しない。このことから、本土壙墓出土の須恵器は稼山6式の範疇に含まれ、本土壙墓の所属時期は7世紀後半から8世紀初頭頃と考えられる。



第24図 土塚墓出土土器 ($S=1:3$)



土壌 (第25図)

調査区の南東隅に位置する。

掘り方の平面形は長径126cm、

短径74cmの楕円形を呈する。

約6cm程掘り下げる後、わずかに平坦面を残し更に30cm程

掘り下げる2段掘りの状況を

呈している。また床面は水平にはならず、東から西へ向か

いわずかに傾斜している。更

に平坦にもならず、断面形は

やや楕形を呈する。遺物は全

く検出されなかった。本土壌

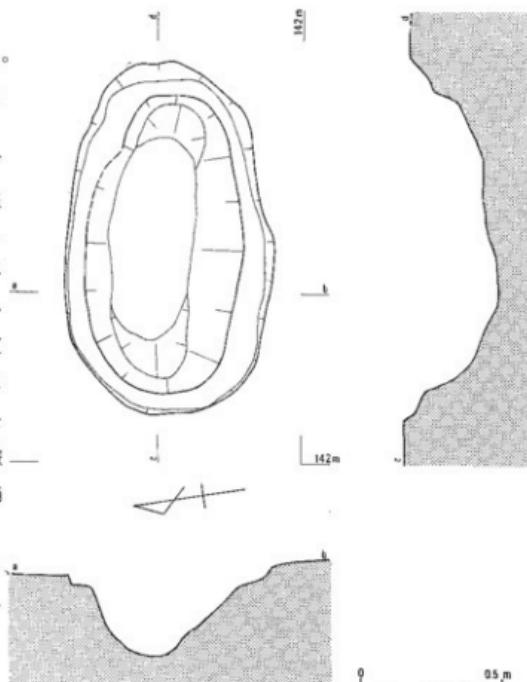
は土壤墓となる可能性も指摘

されうるが、出土遺物もなく

積極的証拠に欠けることから、

ここでは土壌として取り扱つ

ておく。



第25図 土壌平面・断面図 (S=1:20)

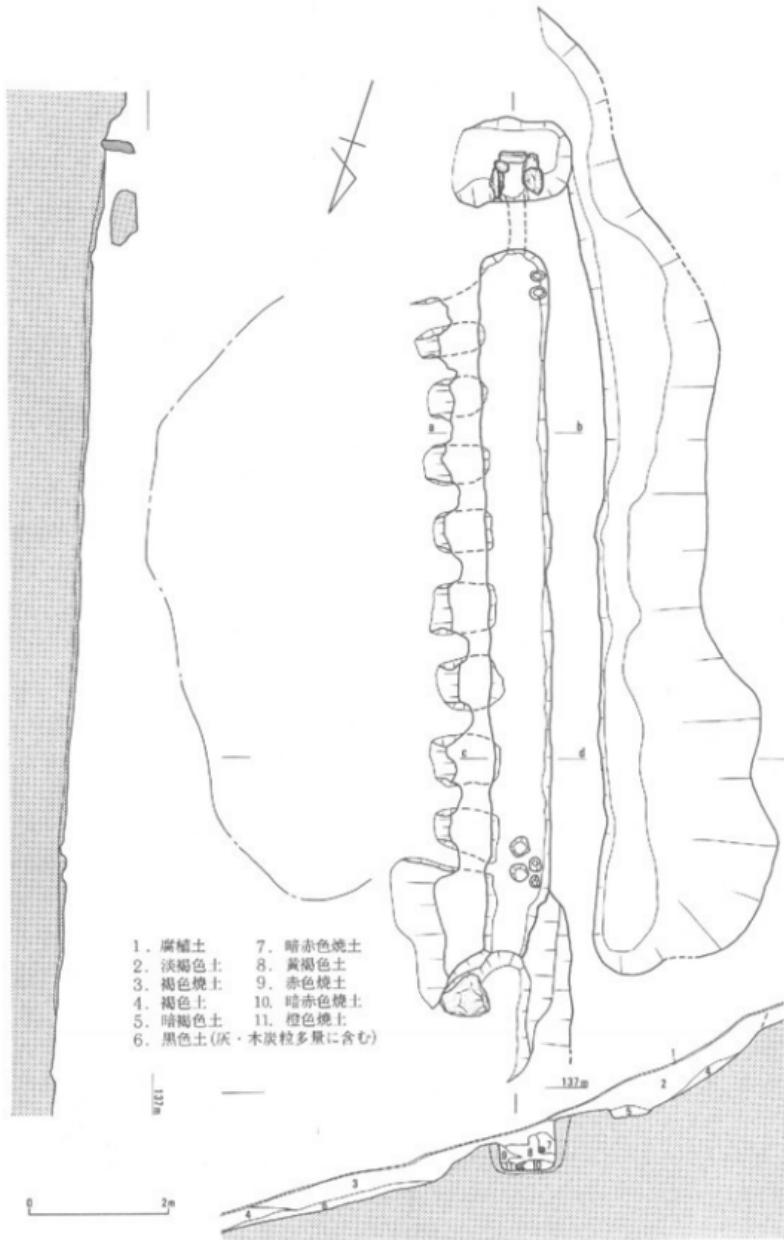
3 窯址

窯址 (第26・27図)

調査区のほぼ中央部に位置し、標高134~136mの斜面で窯の主壁を等高線走向に対しやや斜行させて立地する。窯は焼成部、山側の溝（上方溝）、谷側の平坦面（側庭作業面）等から構成されている。

焼成部は地山を垂直に掘り下げた半地下式構造で、焼成部長9.9m、幅0.7m、山側での掘り下げ深さは約0.7mを測る。谷側には側庭作業面に面して9箇所の横口が等間隔に開口している。ほとんどの横口は焼成部と側庭作業面相反に大きく開いた形状をもち、正面形は長径40cm、短径30cmのややひずんだ楕円形を呈する。最もたき口に近い横口のみは他とは形状が異なり、やや小形で横口中央部はかなり狭くなる。焼成部の北側には炊き口が、南側には煙道が付設されている。

煙道は1.8×1.2mの方形に掘り下げた土壌の中に、「コ」の字状に石組みにより煙出し穴を造り付けたもので、径約30cm、長さ80cmの暗渠で焼成部と連結させている。石組みの構造は奥壁には1枚の平石を立て、側壁には2~3段の平石を積んだものである。周辺には若干の転落



第26図 墓址平面・断面図 (S=1:80)

石が認められることから、本来はもう少し高かったものと考えられる。

炊き口では窯壁幅が狭くなる。炊き口作業面は焼成部床面より1段低くなり、側庭作業面へと続いている。炊き口の東側には幅60cmの石が置かれており、閉窯に用いられたものと考えられる。

焼成部内埋土中には窯の天井壁片が多数含まれていた。その一部には裏面に角材痕の認められるものがあり、天井構築時の骨組み痕跡と考えられる。また、

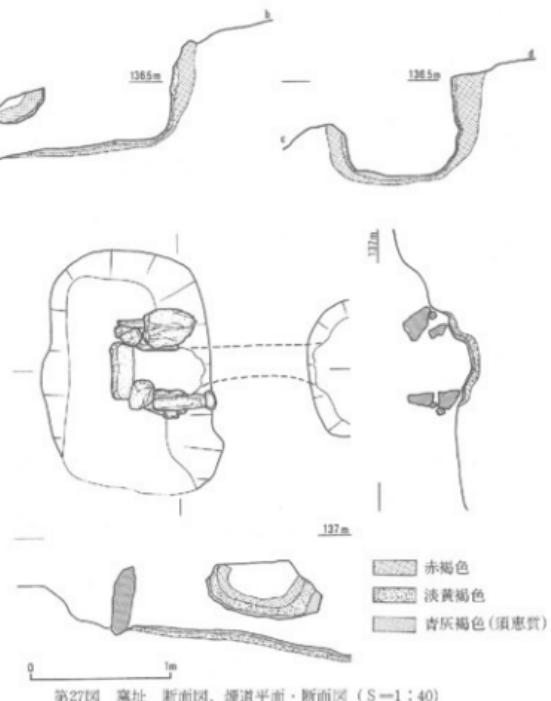
焼成部の床面及び周囲は非常に良く焼けている。床面で8cm、側壁で20cm幅まで被熱による変色をしている。特に床面においては顕著で、床表面は還元による須恵質に変化している。断面ではその下層に淡黄褐色、赤褐色と3層構造を示している。同様の3層構造は煙道の暗渠内部でも認められる。窯壁部分では還元による須恵質の面は認められず、2層構造となる。

上方溝は焼成部の1.4m上方に平行に作られており、長さ12m、最大幅2.2mを測る。南は煙道の掘り方に連結するが、北端は炊き口作業面にはつながらず、その上方で解消している。

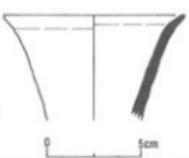
側庭作業面は焼成部の東側に8.4×4.0mの範囲で形成された平坦面である。焼成部とは横口により連接されている。床面直上の埋土には炭・灰層が認められた。

窯址出土土器（第28図）

須恵器の長頸壺の口縁部片である。炊き口に近い横口の上面から出土した。小破片であるため所属時期等は不明である。



第27図 窯址 断面図、煙道平面・断面図 (S=1:40)



第28図 窯址出土土器 (S=1:3)

窯址について

これらの窯址は九州から東北にかけて発見されているものである。岡山県内でも19遺跡から47基が検出されているが、その性格・用途等については不明な部分も多い。最近では津山市緑山遺跡（註2）で2基の製鉄炉と共に9基の窯址が発見され、この窯を製鉄関連遺構として位置づけている。一方、本遺跡をとりまく地域に建設される津山中核工業団地に伴う発掘調査（註3）において7基の窯址が発見されたが、いずれも製鉄炉を伴わない。これらの現状から、今後の大規模調査の成果を待って改めて論及してゆきたい。

4 古道

古道（第4・14図）

調査区のほぼ中央部を東西に走る現在の山道があるが、古道はちょうどこの山道に重複する様に検出された。

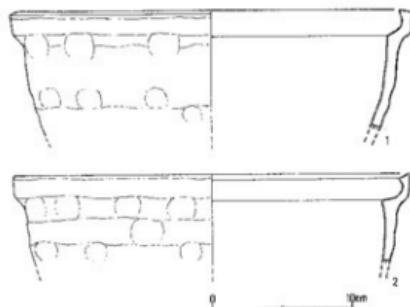
幅は平均約2.2m、深さは平均約50cmを測る。埋土は全体的に下層が非常に固くしまっている。部分的ではあるが床面に砂利層の堆積している箇所、焼土がある箇所等が認められた。

遺物としては埋土中より土鍋片が出土しただけである。

古道出土遺物（第29図）

1・2とも瓦質の土鍋片である。

1は口径28.8cmを測る。ゆるやかに外反しながら立ち上がった胴部は、端部より2cm程下がった部分で一度逆「L」字状に鋭角に外反し、すぐに直立して口縁端部にいたる。端面はわずかに内傾する。底部は遺存しておらず、器高は不明である。内面はナデ、外面は口縁部がナデの他はすべて指頭圧痕による仕上げである。色調は淡黄青灰色を呈す。胎土には2~3mm大の大粒砂粒を含む。



2は口径28.3cmを測る。1と同様に胴部と口縁部との境界部分は逆「L」字状に鋭角に外反し、すぐに直立し口縁端部に至る形態を呈する。口縁端部はやや肥厚し、端面はかなり外傾する。底部は遺存せず器高は不明である。内面はナデ、外面は指頭圧痕による仕上げである。色調は暗青灰色を呈す。胎土には1~2mm大の砂粒を含む。

第29図 古道出土土器（S=1:4）

古道の所属時期

古道からは2点の土鍋片が出土したのみで、正確な所属時期は不明である。土鍋はしばしば中世陶器と伴出する例があることから、一応中世に属する可能性があるという程度にとどめておきたい。

註

- (註1) 村上幸雄『緑山遺跡群』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980年。
- (註2) 中山俊紀『緑山遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集』津山市教育委員会 1986年。
- (註3) 1985~1988年にかけて津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書は1987年から順次刊行予定。

IV まとめ

—金井別所遺跡出土弥生土器の編年的位置—

1 一括遺物

金井別所遺跡においては、住居址2・段状造構1において壺形土器を中心としたかなり良好な一括遺物が検出された。いずれも床面に放棄された状況で出土しているもので、同時に使用されていたことを示唆するものである。しかし、一方ではそれぞれの土器は非常にバラエティに富んでおり、明確に一時期を画するような共通性は認められない。すなわち、西吉田遺跡(註1)において試みられた編年試案に照らし合わせると、新相と古相とのものが一括遺物として出土している。これはどのように考えたらよいのであろうか。まず他遺跡の弥生時代中期の一括性の高い土器群について数例挙げてみたい。

まず、ビシャコ谷遺跡の第5号長方形住居状造構(註2)の一括遺物があげられる。38個体の壺形土器は頸部に施された文様により2つに分類されている。1つは頸部に刺突文をめぐらせるもので、口縁端面には円形浮文が施され、頸部はやや短い(註2文献第20・21図のNo9～14)。もう1つは頸部に凹線文をめぐらせたもので、口縁端面に円形浮文と連続刺突文のどちらかが施され、肩部は櫛描文で加飾される(註2文献第18・19図のNo1～8)。前者はより古い要素として、後者はより新しい要素として理解されているものの、2者が一体となって検出されているので、時期差として反映されない。

ビシャコ谷遺跡の第5号長方形住居状造構の一括遺物と同時期のものに、京免遺跡の土器溜りの一括遺物(註3)が挙げられる。壺形土器はA・B・Cの3類に大別することができよう。A類は長頭でII縁部は外方へ拡張し、頸部には細い凹線が数条めぐり、肩部の文様帶は櫛描文が3～5段で構成されるもので、胴部最大径はやや高い(註3文献第43図No1・3・4、第44図No1・2・4・5)。B類は短かくやや外反した頸部をもち、細い凹線もしくは指頭による連続刺突文を頸部下位にめぐらせ、肩部の文様は比較的少ない(註3文献第44図No6)。さらにC類は頸部がほとんどなく、口縁端面に文様を施し、肩部に波状文をめぐらせるもので、胴部がソロバン玉状に鋭角に張り出すものである(註3文献第44図No6)。

ビシャコ谷遺跡の前者は京免遺跡のA類に、後者は京免遺跡のB類にそれぞれ対応する。更に京免遺跡のC類の土器は、正にビシャコ谷遺跡の第5号長方形住居状造構のNo17の土器であることから、両遺跡における一括遺物の壺形土器における組成は同一であるといえる。このことから、数種類の壺形土器で、ある一定の組成をもって使用されていたことを容認することが

許されるかもしれない。ここでビシャコ谷遺跡のそれを京免遺跡のそれに対応させて、ビシャコ谷A～C類として呼称しておきたい。

押入西遺跡（註4）の住居址7・段状遺構20では、ビシャコ谷遺跡のA～C類に続くものが、それぞれ一括で出土をしている。

從来西吉田遺跡で試みられた弥生時代中期の編年案は、以上3遺跡の一括遺物をみればやや疑わしく思われるものである。確かに凹線文の粗いものから細かいものへの変遷は承認されうるものであるが、その変化は一線を画して行われるものではなく、相互それぞれに関連しあって徐々に変化してゆくものであり、その変化の一線を引くには慎重を期さねばならない。京免遺跡におけるA～C類はそれぞれ新古の要素を多く示してはいるものの、そのA～C類によって編年は行い得ないものである。むしろそれぞれは壺形土器の類型であって、その類型ごとの編年案を作成しなければならないものと考えられる。その基礎になり、それを補墳し、それぞれを関連づけるのが正に一括遺物であると思われる。

2 金井別所遺跡の壺形土器の分類

金井別所遺跡の壺形土器は3つに分類できる。その基準には頸部の凹線文、肩部の文様帯、胴部下半のヘラミガキ等により、バラエティに富む口縁部の形状等はあえて含めずに考慮した。

A類 住居址2の土器番号1、2、4、5、9と段状遺構の1、2がこれである。長頸壺で頸部には粗い凹線文が数条めぐる。頸部の屈曲部から最大径部に至るまでの肩部には、櫛描文による文様帯が多く施される。概して櫛描波状文と櫛描直線文が交互に施されており、櫛描直線文が細かい凹線文に代わるものもある。胴部下半にはタテ方向のヘラミガキが施されるが、その上半はヨコ方向のヘラミガキに切られている。口縁部の形状には統一性は認められず、端面には数条の凹線文をめぐらせた後、連続刺突文を施すもの、更に円形浮文で加飾されたもの等がある。

B類 住居址2の土器番号3、8がこれである。長頸壺で頸部に粗い凹線文がめぐる点ではA類と同様であるが、肩部に認められる文様帯が3段程度と少なく施されるものである。櫛描直線文が細かい凹線文にとって代わるものがある。

C類 住居址2の土器番号6のみがこれである。長頸壺で頸部には細い凹線文が11条めぐる。A・B類に認められる文様帯はなく、また胴部下位の上半に施されるヨコ方向のヘラミガキは認められない。

以上3タイプは前述したとおりそれが編年対象になるものではない。しかし、編年的な流れとしてはA類→B類→C類となるであろうことは西吉田遺跡の編年案を認めるものである。つまり3類が編年輪上で重なっており、それが一括遺物として同時に出土したものがこの金井別所遺跡の例であると考えたい。

3 金井別所遺跡の編年的位置

それぞれの一括土器群中の同一類型により変遷を追ってみることにしたい。

まず、金井別所A類と西吉田第4土墳墓出土一括遺物との比較であるが、前者にはヨコ方向のヘラミガキがあるのに対し、後者にはそれがほとんど認められなくなる。また凹線が細かくなり、その本数も増加する。このことより金井別所A類→西吉田第4土墳墓の変遷順序が与えられる。ビシャコ谷A類においては、頸部の凹線は更に細かくなり、ヨコ方向のヘラミガキは全く姿を消すことになる。このことから西吉田第4土墳墓→ビシャコ谷A類の変遷順序が認められる。

統いて同一一括遺物中の各類型についてみてゆきたい。金井別所B類はA類の亞型として、そのままA類と共に西吉田第4土墳墓につながる。C類については、前後時期の一括遺物中には未検出であり、詳細は不明である。

ビシャコ谷B類は、その祖型を高本遺跡（註5）のI・II式に求めることができる。高本I・II式のものは、かなりしっかりした突帯に指頭による連続刺突文を施すに対し、ビシャコ谷B類ではさほど隆起した突帯とはなっていない。この系譜は押入西遺跡の一括遺物中にも見いだすことができるが、金井別所遺跡、西吉田遺跡には認められない。

ビシャコ谷C類は脣部がソロバン玉状に張るものであるが、金井別所遺跡、西吉田第4土墳墓には類例は認められず、また高本I・II式にもない。このことからこの類型はビシャコ谷遺跡以降に出現するものであると思われる。

ビシャコ谷C類と押入西遺跡の一括遺物との関係については、後者に斜格子ヘラ書き文が普遍的に認められる様になり、個体数的な比率において後者がかなりな部分を占めることから、ビシャコ谷C類→押入西遺跡の変遷順序が与えられる。

以上を総合すると、金井別所遺跡→西吉田遺跡第4土墳墓→ビシャコ谷遺跡→押入西遺跡の変遷順序が得られたことになる。

4 今後の課題

ここでは数少ない資料により、弥生時代中期後半の編年案を組み立て、特に金井別所遺跡の一括遺物の時期的位置を探ってみると根幹をおいて論を進めてきた。しかし、資料の少なきからやや強引に組み立てていることも否めない部分も多くある。それは今後の一括遺物資料の増加をもって更に修正、補填してゆく必要があるものと思われる。

（註1） 行田裕美『西吉田遺跡』、「津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集」津山市教育委員会 1985年。

- (註2) 行田裕美「ビシャコ谷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集』津山市教育委員会 1984年。
- (註3) 中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会 1982年。
- (註4) 津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書未刊。
- (註5) 井上弘、松本和男、泉本知秀、岡山博、山廢康平「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会 1975年。

		西吉田報告書		本報告書		
中 期	古					
	中 葉	高本Ⅰ式		高	本	○
	新	西吉田Ⅰ式、高本Ⅱ式				○
	古	金井別所	金井別所	A	B	C
後 期	西吉田Ⅱ式	西吉田	第4土壤墓			
	中 葉	ビシャコ谷	京免・ビシャコ谷	A	B	C
	新	西吉田Ⅲ式、押入西	押入西	A	B	C
後期						



第30図 金井別所遺跡壺形土器類型

(付) 金井別所遺跡の熱残留磁化による年代推定

中島正志・夏原信義・渋谷秀敏・川井直人

1976年3月30日に試料採取した、上記の遺跡の測定結果について報告します。

①測定結果

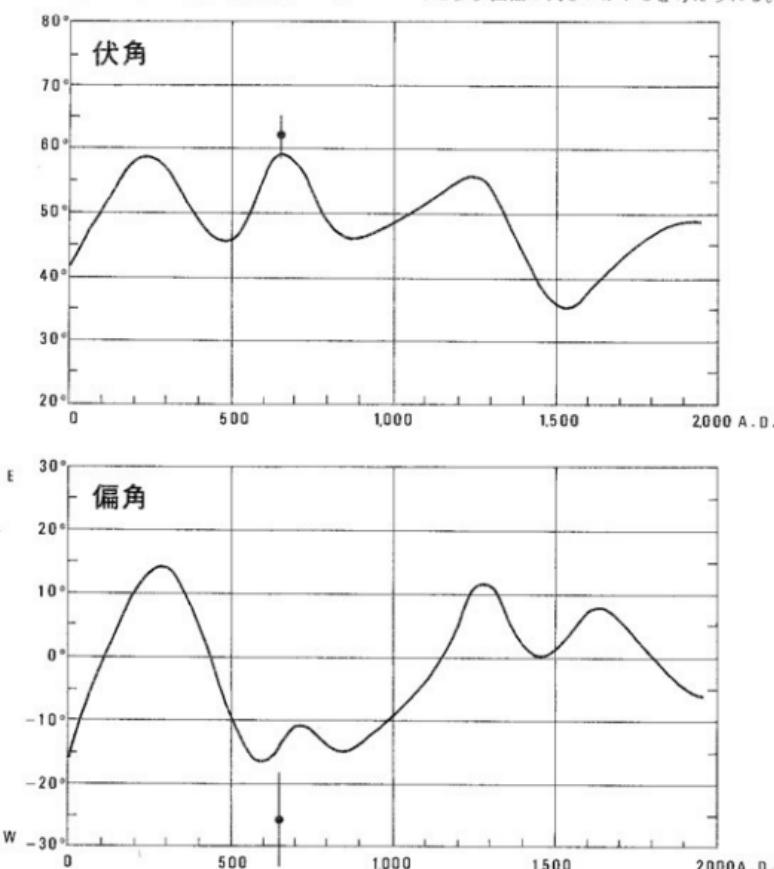
偏角 $-25.5^\circ \pm 7.6^\circ$ 信頼度係数 182.6

伏角 $61.7^\circ \pm 3.6^\circ$ 試料数 10

②推定年代

上記の測定結果を永年変化曲線にあてはめ

ると多少西偏が大きいが7°Cと考えられる。



西南日本の地磁気永年変化

(Hirooka, K. 1971, Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Scr. Geol., Mineral., 38 167~207)

図 版



発掘作業風景



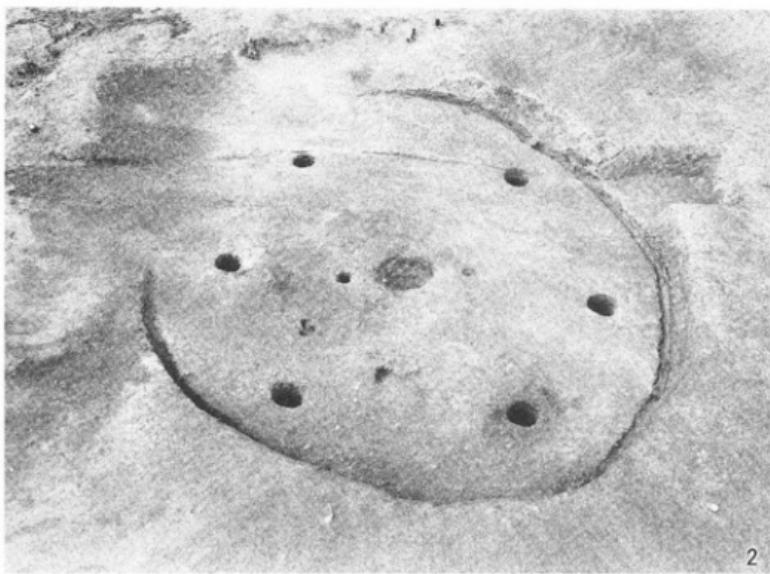
金井別所遺跡遠景



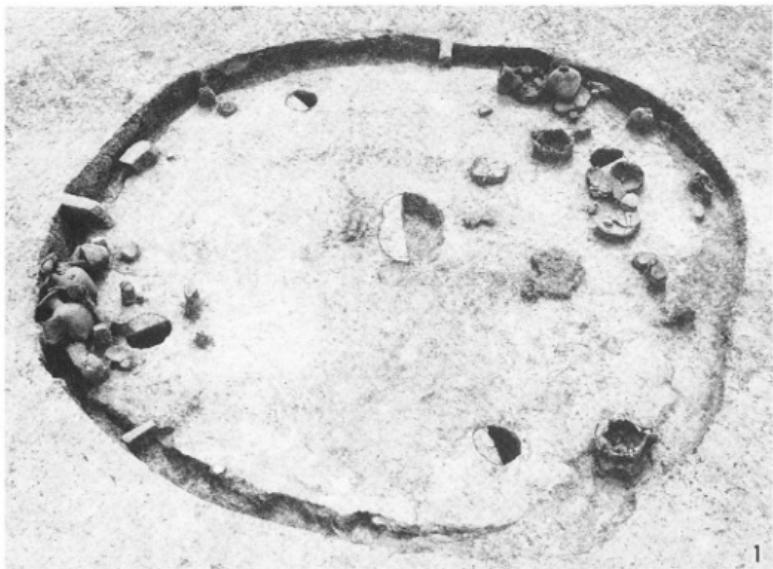
トレンチ設定状況



住居址 1



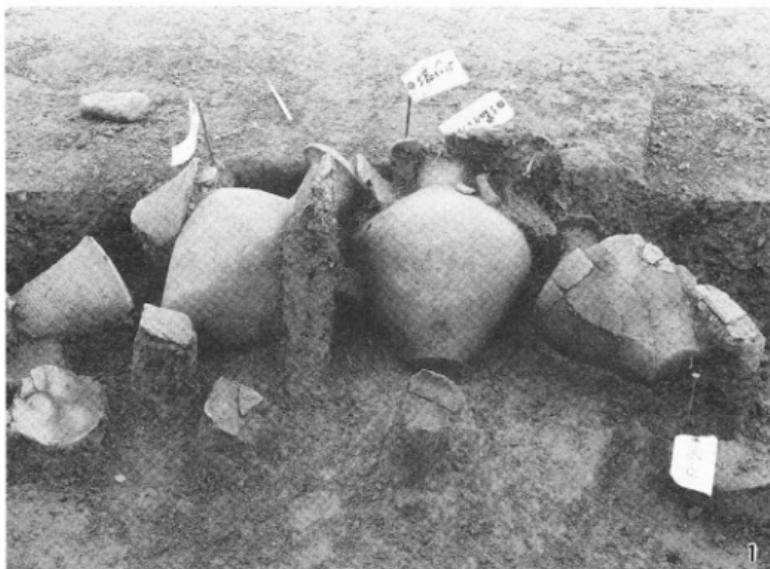
住居址 1 完掘状況



住居址 2



住居址 2・栖遺物出土状況(1)



住居址 2—括遺物出土状況(2)



住居址 3



段状造構 1



土壤層



土壤基 完堤状況



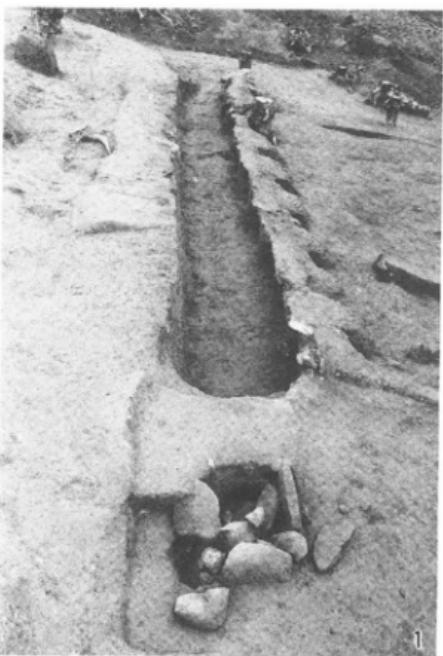
土壤



窯址全景



窯址（吹き口から）



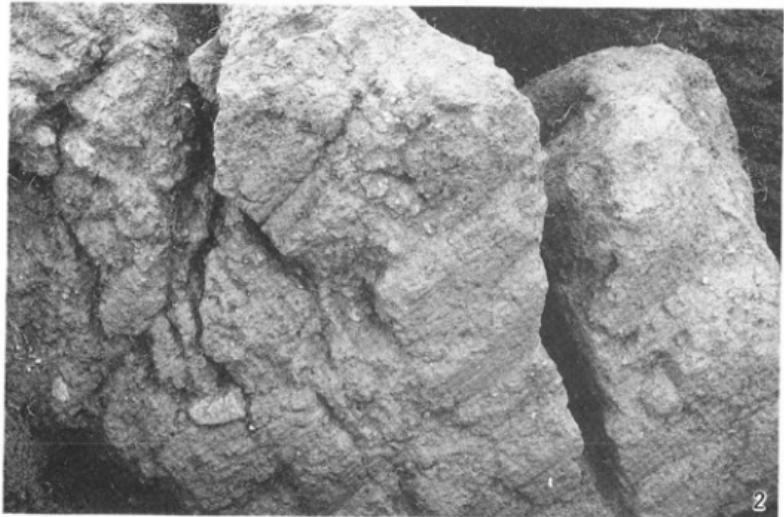
廃址（煙道から）



煙道石組み



竪体内天井築ちこみ状況



天井片角材痕



窯体被熱状況



古遺



1

2



3



4

出土遺物(1)(住居址 2)



9



8

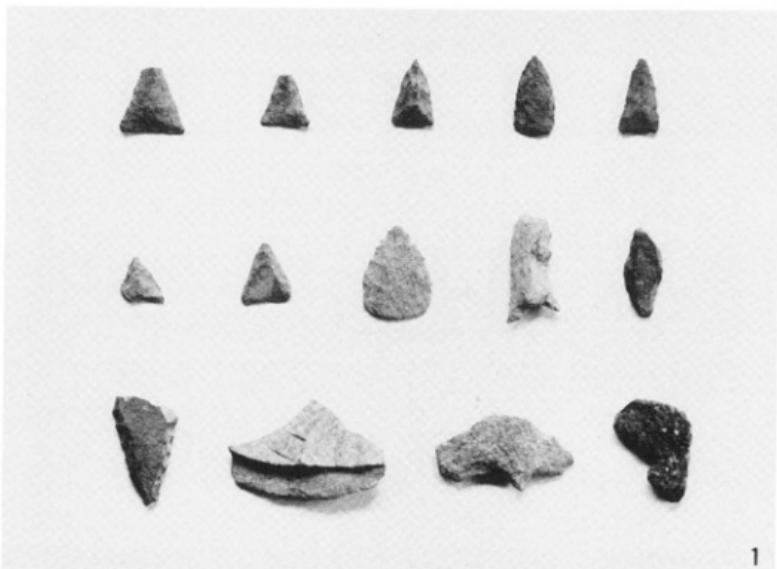


3



24

出土遺物(2)(8・9・24:住居址2、3:段状造構1)



出土遺物(3)(石器、紡錘車)



出土遺物(4)(石器)



出土造物(5)(土壤器)

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集

金井別所遺跡

昭和63年5月31日発行

発行 中国電力株式会社新津山變

電所文化財発掘調査委員会

津山市教育委員会

岡山県津山市山北520

印刷 津山朝日新聞社

岡山県津山市田町13